

筑波大学
社会人のための博士後期課程
「早期修了プログラム」

平成 21 年度 外部評価
総評

筑波大学博士後期課程
早期修了プログラム外部評価委員長
竹内 伸
(東京理科大学近代科学資料館長)

平成 22 年 9 月 30 日

【目次】

- 1 外部評価の経緯
- 2 プログラム全体に対する評価
- 3 各研究科に関する総合評価
- 4 提言

【資料】

- 資料 1 外部評価委員会委員及び専門委員会委員名簿
- 資料 2 外部評価の概要
- 資料 3 専門委員会報告一覧

【付録】

- 付録 1 平成 22 年度以降の外部評価予定について

1. 外部評価の経緯

平成19年4月から、筑波大学大学院ビジネス科学研究科、システム情報工学研究科、数理物質科学研究科の3研究科において、博士後期課程早期修了プログラムが開始された。さらに平成20年4月から、生命環境科学研究科が新たに加わり4研究科体制となった。本プログラムは、平成19年度入試より学生を募集し、平成19年度は21名、平成20年度は24名、平成21年度は21名の学生が履修を許可されている。

学位の質保証システムの必要性は、最近様々な分野で認識され、いくつかの分野で実施されている。学位の質保証システムには、教育プログラムの外部評価が、システムの継続的改善のために必須とされている。博士後期課程に対する、博士論文審査以外の、博士取得者の知識、能力に関する質保証システムはわが国では他には存在していなかった。本プログラムでは、達成度評価を主軸とした学位の質保証システムを設定して、その外部評価を実施することとなった。

外部評価委員会は、平成19年9月に筑波大学より委嘱された3名に、平成20年度生命環境科学研究科が新たに加わった関係で、同年1月に新たに1名を委嘱し計4名から構成されている（資料1）。また、外部評価は資料2に示した「筑波大学博士後期課程早期修了プログラム外部評価の概要」に沿って行われた。

平成22年度に行われた日程としては、6月中旬までに各研究科による外部評価専門委員会現地視察を外部評価の概要（資料2）に沿って21年度の評価を実施した。その際、平成21年度は大学院教育実質化プログラムとして文部科学省から受けている支援の最終年度になるので、過去3年間の実績と平成21年度の当該研究科に対する評価結果を踏まえて、本早期修了プログラムの3年間の総括として、現時点での各評価項目の評価も行った。その後、平成22年8月2日に第7回外部評価委員会を開催し、各専門委員会の評価結果ともに、本プログラムの3年間の実施実績を総合的に評価する作業を行った。

外部評価委員の合意のもと、平成22年9月中旬までに平成21年度外部評価総評案並びにプログラム総合評価総評案を作成し、筑波大学側で確認の上、ウェブページ等にて公表することとした。

2. プログラム全体の総合評価

博士後期課程早期修了プログラムも、3年間の文部科学省支援プログラムとしての最終年度となる平成21年度を迎え、履修生支援体制及びプログラム運営体制を十分に整えた状態で実施された。その結果、1年目の平成19年度（21名履修、16名修了）、平成20年度（24名の履修、17名の修了）と同様に、平成21年度も21名の履修、19名の修了と、コンスタントに学生数が得られ多くの優秀な博士を輩出でき、本プログラムがほぼ当初の計画を実現し、順調に実施されていると高く評価できる。また、平成20年度から本プログラムに参加している「生命環境科学研究科」についても、本プログラムにおける審査及び自己評価が適切に実施され、優れた人材養成という面で十分な成果が得られたと判断される。

これは、各研究科実地視察の結果等から垣間見える、各研究科の履修生確保及び博士の質の保証のためのたゆまぬ努力と、システムとしての学位取得の審査基準の明確さと継続的な改善の賜物であろう。本プログラムを継続する意義は高く、他大学への波及効果を期待したい。

今後も、質の高い相当数の学生を継続的に確保し、引き続き、指導が担当教員任せにならないよう、各研究科・専攻単位で複数指導体制などの指導システムを更に改善していくことを求めたい。

また、ホームページ、リーフレット、大学院案内、入学前説明会、入学時オリエンテーションの際の広報資料には、早期修了プログラム履修指導システムについて、履修希望者が十分に理解できるよう、簡潔かつ分かりやすい表現にすることを求める。

なお、達成度の項目のうち、コミュニケーション能力、国際的通用性等は、本来、短期で修得出来るものではないが、社会人として様々な経験を経てきた中で修得されたものが基礎となってより高い達成度が求められている。また、広い視野、関連分野の知識等に関しては、履修生が本プログラムを通して、多くの教員や他の学生と有意義な交流をもつことで、より高いレベルに育成されていくものと考えられる。本来時間を要する達成度の増強を、早期修了プログラムとしていかに効率よく行うかについて、今後もさまざまな工夫が必要であると思われる。

以上のようにまだ改善の余地は残されてはいるものの、各研究科ともに平成21年度も継続的に改善の努力がなされ、多くの優秀な博士を輩出した実績を踏まえて、平成21年度筑波大学博士後期課程早期修了プログラムの総合評価は

A（優れている）とする。

3. 各研究科に関する総合評価

(1) ビジネス科学研究科

- 1) 平成19年度評価及び平成20年度評価の概要、筑波大学あるいは研究科としての取り組み、評価に対する対応等について大学側より説明され確認をした。
- 2) 履修希望者（社会人）が少ないことに鑑み、本プログラム履修が、履修者本人及び履修者が所属する組織の上位管理者ならびにその組織にとって将来極めて有益であることを伝える努力を更に行ってもらいたい。
- 3) 平成20年度の履修生が1年で修了できなかったが、平成21年度は2名の修了生を出しており、評価できる。
- 4) 履修生の精力的なサポート体制ならびに履修生の進捗管理の機能を有するステージ制の構築など、先進的であり、制度設計など優れている。また、それらを土台とした適切な運用のもと、学位審査が実体的によく運営され博士学位の質保証が厳格に行われている。

以上を考慮し、プログラムの実施は順調であり A (優れている) と評価する。

(2) 数理物質科学研究科

- 1) 最短1年間のプログラムで履修生の負担になる可能性もあるが、セミナー等を通して、通常課程の学生とのコミュニケーションの機会を増やして欲しい。
- 2) 達成度評価の結果を指導に反映させるために、履修生に評価を伝え、各自の意識を高め、今後の指導に生かしていく必要がある。また達成度評価8項目の内容については再検討が必要である。
- 3) 本プログラムが発足して3年が経過し、毎年改善の努力が払われた結果、当初の計画はほぼ実現したと判断される。最短1年間での修了を目的とするこのプログラムは社会にとってとても有益であり大変良い試みなので、これからも継続して実施していくために、広報等を工夫し、より広く本プログラムの存在を発信し、優秀な学生の確保を期待する。ただ、達成度評価を行い総合的博士力を保障することが本プログラムの特徴であるが、評価項目やその評価の方法などには今後改善の余地がある。

以上により、A (優れている) と評価する。

(3) システム情報工学研究科

- 1) 平成20年度の指摘事項に基づき、各研究科及び各専攻のHPが変更され教育目標が把握しやすくなった。
- 2) オリエンテーションで十分な情報が得られなかったという履修生からの意見は重く受け、適切な対応を願う。
- 3) 異なる分野の教員による複数指導教員制を新たに導入しようとしている点が評価できる。
- 4) 履修者数については平成21年度も順調に推移し、14名の履修者のうち12名の修了者を送りだしている。2名に関しては業務の関係で学業が続けられなかったが、プログラムとしては優れた成果を上げている。

以上により、A（優れている）と評価する。

(4) 生命環境科学研究科

前年度同様、在学中の各ステージにおいて審査および自己評価が適切に施されており、各審査のプロセスを確認した結果、本プログラムの履修による履修生の成長が非常に良く感じられた。学問的な深まりに加え、教員や学生との交流を通じて培われた人間力の向上が達成されており、「優れた人材の育成」という面で、本年度も十分な成果が挙げられたものと判断する。

学生の多くが入学時には「国際的通用性」の自己評価ポイントを低くつけていたが、卒業時には高ポイントとすることができ、この点に教員の指導の成果と学位取得による履修者の自信の獲得の両方がよく現れている。

また、本研究科の掲げている明確な学位審査基準は博士の学位の質を十分に保証するものであり、受講者がそれに到達するための道しるべとなった達成度評価システムは非常に有効に機能したものとする。

以上により、A（優れている）と評価する。

4. 提言

本プログラムの今後の履修指導・運営方法等に関する提言として、以下にいくつかの項目を挙げる。これらについては、筑波大学側の改善に向けての適切な対応を望む。また、以下に述べてはいない事項で、各研究科において専門委員会から指摘された事項についても、同様に対応を期待する。

なお、本プログラムは開始後3年が経過し当初の計画をほぼ実現したといえるが、学位の質保証のために、今後も継続的な改善がなされていくことを期待する。

- (1) 本プログラムの最大の特徴である、学位の質を保証する達成度評価システムに関して、8項目におよぶ達成度を4ヶ月ごとに自己点検・評価を行うことは、履修生、教員ともかなりの負担を伴うと思われ、項目を整理して簡素化することが望まれる。併せて、履修生と評価結果を共有し、本人の改善に対する意欲を高めると共に、具体策を含めて指導をして欲しい。
- (2) 社会人の博士取得に対する潜在需要に比べて履修希望者が少ないことに鑑み、本プログラムの履修が、履修生本人及び履修生の所属する組織にとって将来極めて有益であることを企業や公的研究機関などに伝える努力をさらに行ってもらいたい。
- (3) 遠隔地から通う場合には学生の負担になる可能性もあるが、通常課程の学生とのコミュニケーションは双方にとってメリットが大きいので、ゼミ（セミナー）等を通してその機会を増やす努力をして欲しい。
- (4) 履修生の一部から、入学前説明会や入学時のオリエンテーション等の際に、プログラムの内容及び各専攻の修了要件等について十分な情報が得られなかったとの意見もあり、より分かりやすい十分な情報を提供する支援体制を作って欲しい。

付記：「博士後期課程早期修了プログラム」いう新しい試みについての外部評価に当たって、筑波大学博士後期課程早期修了プログラム運営委員会委員長、運営事務局長をはじめ、本プログラムの企画・運営に関わる各研究科の教員および事務職員が、きわめて周到に評価に必要な資料を準備し、適切に外部評価委員会を企画・運営した。このような筑波大学の真摯な取り組みに対し敬意を表すると同時に、このことがこのプログラムを成功に導いた大きな要因であると信じる。

参考資料 1

平成21年度筑波大学博士課程早期修了プログラム外部評価委員会委員及び専門委員会委員名簿

【外部評価委員会委員】

氏名	所属・職名	備考
◎竹内 伸	東京理科大学近代科学資料館長 東京理科大学名誉顧問 東京大学名誉教授, 科学技術振興機構 J S T 事業主幹	
片山 恒雄	東京電機大学 教授	元 防災科学技術研究所理事長
桑原 洋	日立マクセル 相談役	元 総合科学技術会議常任議員
浅島 誠	産業技術総合研究所フェロー 幹細胞工学研究センター長 東京大学名誉教授、特任教授	

◎は委員長

【専門委員会委員】

数理物質科学研究科

氏名	所属・職名	備考
◎竹内 伸	東京理科大学近代科学資料館長 東京理科大学名誉顧問 東京大学名誉教授, 科学技術振興機構 J S T 事業主幹	
平田 照二	ソニー(株)コアデバイス開発本部 高周波伝送・映像システム開発部門 ALT 部 統括部長 チーフ DE	
増田 茂	東京大学 教授	

システム情報工学研究科

氏名	所属・職名	備考
◎片山 恒雄	東京電機大学 教授	
奥野 晴彦	(社)関東建設弘済会	元 国土技術政策総合研究所長
上田 博唯	京都産業大学 教授	

ビジネス科学研究科

氏名	所属・職名	備考
◎桑原 洋	日立マクセル 相談役	
岩村 充	早稲田大学 教授	
八巻 直一	静岡大学情報基盤センター 特任教授	

生命環境科学研究科

氏名	所属・職名	備考
◎浅島 誠	産業技術総合研究所フェロー 幹細胞工学研究センター長 東京大学名誉教授、特任教授	
保坂 幸男	(株)サタケ 専務執行役員	
細谷 昌樹	武田薬品工業(株) 医薬研究本部・開拓研究所 主席研究員	

◎は主査

筑波大学博士後期課程早期修了プログラム外部評価の概要

1. 趣旨

標記プログラムは、一定の研究業績や能力を有する社会人を対象に、標準修業年限が3年以上である博士後期課程を、大学院設置基準第17条のただし書き(筑波大学大学院学則では第44条に該当)を援用して最短1年で修了し課程博士号を取得させるプログラムである。修了生に授与する博士の学位の質保証を図るために、以下に述べる達成度評価システムを導入する。また、外部評価は、このプログラムの実施が適切に進められているかどうかを評価し、本プログラムの改善をはかることを目的に導入する。

2. 達成度評価について

認証評価や分野別評価においては、達成度評価という用語が二重の意味で用いられている。一つは、教育組織・教員団がその教育目標を適切に達成すべく、システムを運用しているかどうかのプロセスの適否を評価するものである。その場合、教育組織・教員団が公開している資料をもとに、教育プロセスの適切性を評価する。

いま一つは、個々の学生についての教育目標達成状況にまで立ち入って、教育成果の適否を評価するもので、その場合、学生個人の成績なども参照の対象となる。

本プログラムについては、この両方の評価を行う。なお、学生個人の成績まで参照する場合でも、個々の学生自体を評価するのではなく、あくまで教育システムとしてのプログラム自体の評価を実施する。

注：達成度評価と水準評価との違いについて

外部評価を行う場合、評価委員が持つ水準を基準に評価を行うわけではなく、教育組織(研究科・専攻)が定めた基準、すなわち教育目標と達成度、に従って評価を行う。従って、ある評価委員が、水準が低すぎる、あるいは高すぎる、と感じたとしても、教育組織が定めた教育目標に従っていれば、判定は合格となる。ただし、水準が適切でない、と考えられる場合には、そのことを別に意見・コメントとして述べることができる。

3. 達成度評価項目

達成度を評価するために、研究科・専攻特有の教育目標に基づいて、次に示す8つの達成度評価項目を設けている。

- ① 専門基礎：入学者の専門分野について、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。
- ② 関連分野基礎：専門に関連した分野について、専門分野ほど深くはないとしても、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。

- ③ 現実問題の知識: 現実の問題について、博士の学位にふさわしいレベルのセンス・見識を有しているか。
 - ④ 広い視野: 博士の学位にふさわしい視野の広さを有しているか。
 - ⑤ 問題設定から解決まで: 専門的応用能力である問題設定から解決までのプロセスを理解し、具体的解決に導くことができるか。
 - ⑥ プレゼンテーション・コミュニケーション能力: 博士の学位にふさわしいプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を有しているか。
 - ⑦ 国際的通用性: 専門分野において国際的に通用する学識を有しているか。
 - ⑧ 学術的成果: 博士の学位を授与してよいと判定できる学術的成果を有しているか。
- 各研究科・専攻は、その教育目標に関連して、上記 8 項目の達成度を各学生について評価する。評価結果は外部評価委員に提示される。

4. 研究科が準備する資料

原則として次の 3 種類の資料を準備する。

- 4. 1 自己評価書
- 4. 2 自己評価書の添付資料(公開された資料と内部資料の一部)
- 4. 3 実地視察時資料(学生個人の自己達成度評価書、教育組織による各学生の達成度評価書など)

5. 評価委員会

次に示す外部評価委員会と本プログラムを開設する研究科毎の専門委員会の 2 種類から構成する。

5. 1 外部評価委員会

各専門委員会からの評価報告を取りまとめて、総評を作成する。委員長 1 名および委員数名からなる。

5. 2 専門委員会

本プログラムを開設する研究科毎に設置し、次の項目に示す評価を実施する。外部評価委員会委員と兼任することを妨げない。主査 1 名および委員 1~2 名よりなる。

6. 評価の手順

評価は原則として以下の手順に従い毎年実施するものとする。

- 6. 1 実地視察の準備 : あらかじめ、自己評価書と添付資料を専門委員に送付する。実地視察の前に、事前評価を依頼する。

6. 2 実地視察：実地視察は、専門委員会を兼ねて、1日程度で次の内容を実施する。
 - ・専門委員集合、実地視察資料点検、教員面談、学生面談、施設視察(必要な場合)、評価報告案作成
6. 3 各専門委員会主査により専門委員会評価報告書案を実地視察後10日以内に外部評価委員会委員長に送付する。
6. 4 外部評価委員会を開催し、各専門委員会評価報告書を確認し、評価結果の公表範囲等を決定する。
6. 5 外部評価委員会委員長は総評を作成し、専門委員会評価報告書とともに筑波大学に伝達する。
6. 6 事実誤認等がある場合、筑波大学は外部評価委員長と協議する。
6. 7 外部評価委員会委員長は総評を決定する。
6. 8 筑波大学は評価結果を公表する。

7. 評価記入の方法

専門委員会は、別に準備する外部評価シートを利用し、評価対象の研究科についてA(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善を要す)のいずれかを「判定」欄に記入すると同時に、その根拠を記入する。その他のコメントがあれば、該当欄に記入する。なお、複数の専攻について個別に評価する場合は、それぞれの専攻を区別して適宜記入する。シートは適宜拡大して差し支えない。

シートは上記達成度基準の8項目それぞれについて作成されてはいないが、8項目のいずれかに言及する必要があるときは、根拠の欄に適宜記入するものとする。

各項目についての評価を総合して、評価対象の研究科の総合評価についてA(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善を要す)のいずれかを「判定」欄に記入すると同時に、その根拠を記入する。指摘事項・コメント欄には、各項目で指摘されなかった本プログラム全体に係る事項等も含めて記入する。

なお、この外部評価シートは、専門委員会評価報告書を兼ねる。

8. 総評

外部評価委員会委員長は、各専門委員会評価報告書を基に、本プログラムの改善について勧告あるいは助言を行うための総評をまとめる。また、本プログラム全体及び評価対象の研究科それぞれについて、S(特に優れている)、A(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D



(早急に改善を要す)のいずれかの総合評価を行う。総合評価 S および A についてはその理由を示し、総合評価 C、D については、問題点を指摘する。

9. 評価結果への教育組織の対応

総合評価において問題点が指摘された場合、教育組織(研究科・専攻)は、外部評価委員会に対し、次回の評価までに問題点に対処する方法とその時期を示すものとする。また、対処の結果が明らかになった時点で、その結果を外部評価委員会に報告しなければならない。

平成21年度筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」ビジネス科学研究科 外部評価シート

評価者：(ビジネス科学研究科外部評価
専門委員会)桑原洋委員長、岩村充委
員、八巻直一委員

注1: 判定は、A(すぐれている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善が必要)のいずれか

注2: 評価内容が前年度と同じ場合には、「前年度同様に」と付け加えて頂き、同様の記述をお願いいたします。

番号	評価項目	判定	根拠・指摘事項	その他のコメント・問合せ事項
1 教育目標				
1.1	教育目標が公開され、周知されているか	B	前年度同様に、大学および研究科としての取り組みの説明を受け、また、日経などのメディアによる広報活動の更なる拡大を確認した。一方、履修希望者(社会人)が少ないことにかんがみ、本プログラム履修が、履修者本人及び履修者が所属する組織の上位管理者ならびにその組織にとって将来極めて有益であることを伝える努力を更に行ってもらいたい。	
1.2	教育目標は博士課程として適切であるか	A	社会人を対象とした研究科・専攻としてのこれまでの実績を十分に踏まえ、それを良い方向に発展させており、教育目標の設定はすぐれていると判断できる。	
2 カリキュラム				
2.1	プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか	A	前年度同様、プログラム履修者(2名)の履修状況の説明を受け、彼らの教育・研究の推進にふさわしいカリキュラムが準備されていることを確認した。	
3 学生募集				
3.1	学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか	B	前年度同様、早期修了プログラムに関連するホームページ・リフレット等で趣旨の説明が加えられていることを確認した。なお、プログラムの有益性の説明にはなお努力を期待したい。	
3.2	プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか	A	前年度同様、応募状況と審査過程についての説明を受けた。応募者による達成度評価シートの作成を確認し、教員による評価が厳密に行われていることを確認した。	
4 教員組織・指導方法				
4.1	指導に十分な教員組織が存在するか	A	前年度同様、プログラムへの参加・協力教員が増えたことなど、組織的な対応が図られており、指導に十分な教員組織が存在することを確認した。	
4.2	指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか	A	前年度同様、複数教員による指導体制が確立され、機能していることを、履修生の記録ならびに審査会記録等から確認した。	

4.3	教員間の連絡組織が機能しているか	B	前年度同様、教員間で履修生の研究の進捗状況の共有、ならびに、審査会および毎月開催の教員会議、教育担当教員による打合せを利用した連絡組織が事務組織とともに機能していることを確認した。	
4.4	指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか)	A	ステップ制による指導方法のシステム化が達成され、審査記録、加えて、指導教員による指導記録が引き続き整備されていることを確認した。	
5 教育環境				
5.1	当該プログラム実施のための設備は十分であるか	B	前年度同様、社会人学生の履修に有利な東京キャンパスを利用していることを確認した。	
5.2	当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか	B	前年度同様、大学としての予算面での支援などの状況の説明を受け、支援体制に問題がないことを確認した。	
6 履修				
6.1	プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか	A	ステップ制がプログラムの趣旨を反映した進捗管理機能を有していること、また、審査会における評価基準を具体的に示していることなどを確認した。	
6.2	学生に対する達成度評価は適切になされているか	B	前年度同様、達成度評価シートの更新状況および審査状況を確認した。また、記録が事務組織によって適切に管理されていることを確認した。	
6.3	各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか	B	前年度同様、入学時、ステップ審査時に達成度評価シートを改訂・更新し、正しく認定を受けていることを確認した。	
7 学位審査				
7.1	学位審査の基準と審査方法は適切であるか	A	前年度同様、学位審査の基準の説明を受け、また、学外からの審査員の動員など審査方法の説明を受け、引き続き優れていることを確認した。	
8 継続的改善				

8.1	継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか	A	前年度同様、教員間の情報共有・意見交換のための会議の開催、および規則の改訂の状況説明を受け引き続き優れていることを確認した。	
9	総合評価	判定	指摘事項	コメント・問合せ事項
	総合的にみたプログラムの評価	A	履修生の精力的なサポート体制ならびに履修生の進捗管理の機能を有するステージ制の構築など、先進的であり、制度設計など優れている。 また、それらを土台とした適切な運用がなされ、学位審査の実質化及び博士学位の質保証が厳格に行われている。	

平成21年度筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」 数理物質科学研究科 外部評価シート

注1: 判定は, A(すぐれている), B(妥当), C(改善の余地あり), D(早急に改善が必要)のいずれか。
項目9に関してはS(特に優れている)を可とする。

評価者: (数理物質科学研究科外部評価専門委員会) 竹内委員長、
平田委員、増田委員

注2: 評価内容が前年度と同じ場合には、「前年度同様に」と付け加えて頂き、同様の記述をお願いいたします。

番号	評価項目	判定	根拠・指摘事項	その他のコメント・問合せ事項
1	教育目標			
1.1	教育目標が公開され、周知されているか	A	前年度同様に教育目標は提示されている。	
1.2	教育目標は博士課程として適切であるか	A	指摘事項が改善されている。	
2	カリキュラム			
2.1	プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか	A	前年度同様に多様なカリキュラムが提示されている。	
3	学生募集			
3.1	学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか	B	各専攻固有の要件をリフレットに記載することが好ましい。	
3.2	プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか	B	今後、8項目の達成度評価の内容については再検討の必要がある。	
4	教員組織・指導方法			
4.1	指導に十分な教員組織が存在するか	A	昨年度と同様に十分な教員組織が存在する。	
4.2	指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか	A	昨年度と同様に修了者へのヒアリングにより確認した。	

4.3	教員間の連絡組織が機能しているか	A	昨年度と同様に中間報告書と実施視察により確認した。	
4.4	指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか)	A	ポトフォリオのフォーマットが改善された。	
5	教育環境			
5.1	当該プログラム実施のための設備は十分であるか	A	システムとして設備が十分整った。	
5.2	当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか	A	昨年度と同様に、体制は十分である。	
6	履修			
6.1	プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか	B	達成度評価の結果を指導に反映させるために、履修生に評価を伝え、各自の意識を高め、今後の指導に生かしていく必要がある。	
6.2	学生に対する達成度評価は適切になされているか	A	昨年度同様に修了者及び教員へのヒアリングにより確認した。	
6.3	各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか	A	履修生が各審査において、自己評価を行っている。	
7	学位審査			
7.1	学位審査の基準と審査方法は適切であるか	A	外部専攻の審査員を加える努力がなされている。	
8	継続的改善			
8.1	継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか	A	昨年度同様に継続的な改善のシステムがあり、機能している。早期修了プログラム運営委員会議事録等により改善の努力が行われていることを確認した。	
9	総合評価	判定	指摘事項	コメント・問合せ事項

	総合的にみたプログラムの評価	A	<p>本プログラムが発足して3年が経過し、毎年改善の努力が払われた結果、当初の計画はほぼ実現したと判断される。</p> <p>最短1年間での修了を目的とする、このプログラムが社会にとってとても有益であり、大変よい試みなので、これからも継続して実施していくために、広報等を工夫し、より広く本プログラムの存在を発信し、優秀な学生の確保を期待する。</p> <p>ただ、達成度評価を行い、総合的博士力を保障することが本プログラムの特徴であるが、評価項目やその評価の方法などには今後改善の余地がある。</p>	
--	----------------	---	--	--

平成21年度筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」 システム情報工学研究科 外部評価シート

注1: 判定は、A(すぐれている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善が必要)のいずれか。
項目9に関してはS(特に優れている)を可とする。

評価者:(システム情報工学研究科外部評価専門委員会)片山主査、奥野委員、上田委員

注2: 評価内容が前年度と同じ場合には、「前年度同様に」と付け加えて頂き、同様の記述をお願いいたします。

番号	評価項目	判定	根拠・指摘事項	その他のコメント・問合せ事項
1	教育目標			
1.1	教育目標が公開され、周知されているか	A	20年度の指摘事項に基づき、各研究科及び各専攻のHPが変更され、教育目標が把握しやすくなった。	
1.2	教育目標は博士課程として適切であるか	A		教育目標と関連し、8項目の達成度評価の見直しが進められていることは評価できる。
2	カリキュラム			
2.1	プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか	A	特に指摘事項は無し。	
3	学生募集			
3.1	学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか	A	出張説明会の実施など、具体的な効果のある改善が実施された。	オリエンテーションで十分な情報が得られなかったという、履修生からの意見は重く受けとめるべき。
3.2	プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか	B	実施内容は妥当である。	
4	教員組織・指導方法			
4.1	指導に十分な教員組織が存在するか	A	教員組織は学生指導に十分である。	
4.2	指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか	B	新たに異なる分野の教員による複数指導教員制を導入しようとしていることは評価できる。	

4.3	教員間の連絡組織が機能しているか	A	連絡会と懇談会の定期的な開催が評価に値する。	
4.4	指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか)	B	担当者の戸惑いもなくなり、安定して運用されている。	
5	教育環境			
5.1	当該プログラム実施のための設備は十分であるか	A	パンフレット等により判断した。	
5.2	当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか	A	特に指摘事項は無し。	
6	履修			
6.1	プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか	A	平成21年度履修生および指導教員へのインタビューによる。	
6.2	学生に対する達成度評価は適切になされているか	B	適切に実施されている。	
6.3	各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか	A	平成21年度履修生および指導教員へのインタビューによる。	
7	学位審査			
7.1	学位審査の基準と審査方法は適切であるか	A	各専攻長へのインタビューによる。	
8	継続的改善			

8.1	継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか	A	外部評価委員会の指摘・提言に対し、研究科の運営委員会及び早期修了プログラム実施委員会が連携して、適切な処置がとられた。	
9	総合評価	判定		コメント・問合せ事項
	総合的にみたプログラムの評価	A	早期修了プログラムはH21年度も順調に推移し、14人の履修者のうち12人の修了者を送りだしている。2名に関しては業務の関係で学業が続けられなかったが、プログラムとしては優れた成果を上げている。	

平成21年度筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」生命環境科学研究科 外部評価シート

注1: 判定は, A(すぐれている), B(妥当), C(改善の余地あり), D(早急に改善が必要)のいずれか。
項目9に関してはS(特に優れている)を可とする。

評価者: (生命環境科学研究科外部評価専門委員会) 浅島主査、細谷委員
保坂委員

注2: 評価内容が前年度と同じ場合には、「前年度同様に」と付け加えて頂き、同様の記述をお願いいたします。

番号	評価項目	判定	根拠・指摘事項	その他のコメント・問合せ事項
1	教育目標			
1.1	教育目標が公開され、周知されているか	A	前年度同様に生命環境科学研究科の教育目標は各専攻ごとにHP上で適切かつ恒常的に公開されており、受講希望者にとっての利便性が十分に図られている。	
1.2	教育目標は博士課程として適切であるか	A	前年度同様に専攻ごとに特色を生かした教育目標が掲げられ、いずれも究極は「優れた人材の育成」を目指すものであり、社会人を対象とした博士課程にふさわしい内容となっている。	
2	カリキュラム			
2.1	プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか。	A	前年度同様に学問的な分野の幅広さに加え、基礎から応用までの深みのあるカリキュラムが準備されている。各専攻が提供する講義やセミナーによる関連分野の知識の習得に加え、人間力を涵養するための大学院共通科目も用意されており、社会人としてさらなるステップアップが期待できるような内容が十分に盛り込まれている。	社会人の学生が受講しやすい夜間に開講している授業や、国際的通用性を養うためのオンライン英会話の授業の提供など、様々な工夫も行なわれている。
3	学生募集			
3.1	学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか	A	前年度同様に早期修了プログラムのHPの公開やパンフレットの配布、学術雑誌への広告の掲載、秋葉原や企業へ出向いての説明会など、プログラムの趣旨を公開・説明するための様々な工夫が行なわれている。	
3.2	プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか	A	前年度同様に履修資格の基準が明確に提示され、入学前には学生が作成した達成度評価シートなどによる点検、資格審査が行なわれている。また、事前相談の窓口も用意されており、それぞれの受講希望者の現状やレベルに合わせたきめ細かな対応ができている。	
4	教員組織・指導方法			
4.1	指導に十分な教員組織が存在するか	A	前年度同様に各専攻には様々な専門分野にわたって経験豊富な教員が在籍し、副指導教員制による指導協力体制がきちんと確立されている。	

4.2	指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか	A	前年度同様に異なる専門分野の教員が副指導教員体制に組み入れられており、互いに協力しながら学生の指導に当たり、研究上のアドバイスや研究手法や知識の習得などの面で受講者にとっての大きなメリットとなっている。
4.3	教員間の連絡組織が機能しているか	A	前年度同様に教授会、生物系専攻合同教員会議、研究指導担当教員会議など、教員同士の定期的な会合が行なわれており、特に研究指導担当教員会議では専攻内における審査経過が報告され、問題点があれば議論が行なわれている。
4.4	指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか)	A	4段階にわたる審査と、それに際しての達成度評価の実施というプロセスがきちんと確立されており、それに基づいた「研究指導ポトフォリオ」が作製されているため、教員の指導技法や理念について共有化できている。また、専攻合同ならびに専攻ごとにカリキュラムや指導方法などの面から指導教員をバックアップする体制も用意されている。
5 教育環境			
5.1	当該プログラム実施のための設備は十分であるか	A	前年度同様に研究設備や教育機器、講義室、セミナー室などが十分に用意されている。
5.2	当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか	B	前年度同様に本プログラムに対しての専攻科をあげての教員の協力、ならびに大学全体として支援室および大学院課からの支援が行なわれている。
6 履修			
6.1	プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか	A	前年度同様に研究指導教員からは研究室のセミナーなどの機会を通じて定期的な履修指導が行なわれており、各審査・評価のステージにおいても主指導・副指導の複数の教員による履修指導が適切に行なわれている。
6.2	学生に対する達成度評価は適切になされているか	A	前年度同様に各審査の段階で学生の達成度評価を実施しており、記録の公平性だけでなく、保管や透明性についても配慮が十分にされている。
6.3	各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか	A	前年度同様に学生は各審査の段階で自己評価シートを作成し、指導教員や専攻長はその内容を精査するとともに、専攻教務係において適切に保管・管理されている。
7 学位審査			

7.1	学位審査の基準と審査方法は適切であるか	A	前年度同様に学位審査基準は明確化されている。学位審査は基準に従って公正かつ厳格に行なわれており、最終的な学位取得資格の認定は生命環境科学研究科運営委員会で審議・承認されている。	
8	継続的改善			
8.1	継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか	A	前年度同様に生物系3専攻合同委員会によってプログラムの実施状況と体制、規定などについて常にチェックが行われている。達成度の評価を再検討する機会も設け、より公平性を保つための仕組みも取り入れた。外部評価専門委員会メンバーと教員との面談の機会を利用し、積極的な意見交換によって、さらなるレベルアップのアイデアなどが話し合われた。	
9	総合評価	判定	指摘事項	コメント・問合せ事項
	総合的にみたプログラムの評価	A	前年度同様に在学中の各ステージにおいて審査および自己評価が適切に実施されており、各プロセスをレビューした結果、本プログラムの履修による受講者の成長が非常に良く感じられた。学問的な深まりに加え、教官や学生との交流を通じて培われた人間力の向上が達成されており、「優れた人材の育成」という面で、本年度も十分な成果が挙げられたものと判断する。学生の多くが入学時には「国際的通用性」の自己評価ポイントを低くつけていたが、卒業時には高ポイントとすることができ、この点に教官の指導の成果と学位取得による受講者の自信の獲得の両方がよく現れている。また、本研究科の掲げている明確な学位審査基準は博士の学位の質を十分に保証するものであり、受講者がそれに到達するための道しるべとなった達成度評価システムは非常に有効に機能したものとする。	

平成 22 年度以降の早期修了プログラム外部評価予定について

平成 25 年 1 月～2 月 第 8 回外部評価委員会

平成 25 年 4 月～5 月 (H22 年度～H24 年度に対する)
外部評価専門委員会実地視察

平成 25 年 7 月～8 月 第 9 回外部評価委員会

平成 26 年 1 月～2 月 第 10 回外部評価委員会